

山本周五郎

浪人小説集



浪人小説集

昭和五十一年四月十日 初版発行

著者 山本 周五郎

発行者 増田 義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

TEL 〇三(五六二)四三一―

振替東京一―三二六 一〇四

関西支局 大阪市北区真砂町五三

TEL 〇六(三六三)一七〇六

印刷 研文社 製本 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取替えいたします

山本周五郎

浪人小説集

実業之日本社

浪人小説集 目次

安永一代男	5
五十三右衛門	241
おもかげ抄	261
解説	280

木村久邇典

安永一代男

聞しぐれ

一

「先生、先生！」

雨戸を破れんばかりに叩く音だ。

「先生は、いらっしやいませんか。お明けなすつて、辰でございます先生！」

「おう」

安芸新太郎は盃をおいて立上った、玄関の格子を明け、棧を外して戸を明けると、転げるように跳びこんで来た男、

「辰か」

「先生、お逃げなすつて」

と男はそこへ意久地なくへたりこんで、

「やって来ます、七人ずれの侍が斬り死にの覚悟、水盃をしているところを見ました、早くお逃げなすつて」

聞しぐれ
「あわてるな、そんなところへ坐つて騒がずと、ま

あ上へあがれ」

「だ、伊達にへたつてるんじゃないんで、腹をやられて、先生」

と辰は片手を下しながら、

「私や、もういけねえ」

「腹をやられた？」

新太郎は辰のうしろへ廻つて抱え起すと、片手で押えている腹の傷へぐつと手をやった。ねっとり温かい血の手ざわり。

「辰！」

「へえ」

「蚤に刺された程の傷だぞ、ばか奴！ こんなことでもういかんなどと、江戸ッ児の面汚しだ、しっかりしろ」

「面汚してもいけねえ」

辰は口惜しそうに、

「もう眼が見えねえ、先生！」

「さあ拙者につかまれ」

新太郎は辰の片手を肩に、担ぎあげるようにしながら座敷へあがった。

「私なんかにかまわねえで、お逃げなすって先生、もうやって来ます」

「黙っている」

そこへおろすと手早く取出した外科薬と巻木綿、馴れた手順で、辰の着物を脱がすと、脾腹を横に三寸ばかりの傷。

「ざまあ見ろ」

と新太郎が笑った。

「腸の面も見えぬではないか、辰！」

「へえ」

「是でも眼が見えぬか」

「へえ、どうやら、見えて来ました」

「笑わせるな、さあ此方に向け」

薬で洗って木綿を巻く、荒療治だが生命に別状なしと知れたから歯を喰いしばって我慢する辰だ、

「痛いか」

「むーなあに、蚤の喰った程も感じねえ——ふう」

「脂汗が出ているぞ」

「それや駈けて来たからで——」

「はははは」

手当が終ると、新太郎は辰をそこへ仰臥させ、軽く夜着をかけてやる、

「あ、そこへ坐っちまっちゃあいけねえ、先生！」

新太郎は再び酒の膳に向う、

「お逃げなさらねえと——」

「もういいうな」

新太郎平然と盃を口へ、

「貴様今日までに一度でも、安芸新太郎の逃げるのを見たことがあるか」

「へえ、そ、それやありません」

「それ見ろ」

は、せの煮びたしを摘まんで、

「拙者は母の胎内にいる時分から逃げるのは不得手であった！」

「誰が」

と辰が苦しさを忘れて、

「胎内で逃げたり、隠れたり——」

「あははは、誰でもそうかの」

新太郎は笑って、

「それは不思議」

と澄ましている。

一一

「全体」

やがて新太郎が振返って、

「その腹の傷、どこで受けた」

「今日」

辰は低い声で、

「出羽邸で、また賭場が立ちましてね」

「こいつ」

「まあ、お聞きなすって、例の通りすっかり剣がれての帰り、三平と二人で金杉の「裏松」で一杯ひっかけていると、対立ついでの向うで九曜星、九曜星と云う声がるんで」

「む！」

「この辺で九曜星と云えば業平浪人……じゃあ無

え、先生だ」

「そんな事を云い直すな」

「先生の外にゃあねえ筈、何を吐かしやあがるかと聞いてみると、これが斬り込みの相談だ」

辰は息をついだ。

「槍二人、鉄砲一人、刀四人、ふた組に分れて裏と表から討入る、一人も生きて帰るな、時刻は四つ半（午後十一時頃）と、水盃をしていやあがる、尚よく聞くと鉄砲を持った野郎は、裏庭の棗なつめの樹に登っていて隙があつたらぶつ放すと云う計略、裏庭の棗の樹と云えば此家に定っている、こりゃ直にお知らせしなけりゃあ」と

辰はふと口をつぐんで、

「先生、外で、何か音がしやしませんかい」

「大丈夫、拙者がついて居る」

「もう四つは廻っているでしょうねえ」

「いまして聞えたようだな、まあ話を続けるよ」

「へえ」

とまだ戸外の物音に耳を澄している、

「どうした」

「なんだかどうも、今たしかに変な物音がしたようなんで」

「臆病な奴だな、そんなに外が気になるなら、雨戸をみんな明けといてやるるか」

「否々それにや及びません」

辰慌てて手を振った。

「それからね、三平の奴にそっと耳うちして私だけ外へ出たんで、急いで橋を渡って、此方へ曲がる暗がりへ来ますとね、闇の中から誰だか知らねえが、

(若いの待て)

と出やがったんで、

「何だ」

訊くと、いきなり、

(八荒不破！)

と云やあがって居合抜かなんかやりやあがった、畜生と思って横っ跳びにとんだが、ここん所が焼火箸を当てられたような具合、やられた、と思うと無我夢中で、

「野郎名乗りやあがれ」

と怒鳴りながら、後も見ずに此所まで、駆けつけて来たんで——

「相手は名乗ったか？」

「へえ、どうだかよく知れねえ」

「あははは」

新太郎は笑って盃をなめる。

「名乗りあやがれと云って置いて韋駄天に逃げたのでは、相手も名乗りようがあるまい、はははは」

「笑いごっちゃありませんぜ」

辰は不服そうに口を尖らした、新太郎は声を改めて、

「しかしその男、八荒不破と云って抜討をかけた奴、何者であらう」

「私あ、裏松にいた七人組の同類が、私の脱けたのをみつけて追いうちをかけたのだと思いましたが——」

「それなら直ぐにも斬り込んで来る筈」

「辻斬にしちゃあ妙だ！」

云っていると、表の戸を静かに叩く音がした。辰は首をすくめて、

「そら来た」

と願え声である。

三

「お頼み申す」

戸を叩いては、低くおとずれる声。

「辰、起きろ」

「へえ」

「窮屈だろうが暫く我慢しろ」

助け起して、戸棚の中へ辰を入れる、あとを閉めると、刀架から愛刀武藏国宗二尺七寸という大業物を取って抜く、右手に提げて玄關へ下りて行った。

「お頼み申す、お頼み申す」

「——」

無言で棧を外す、雨戸へ手をかけると、がらり明ける、同時にさつと斬った。

「わっ！」

といつてのめり込んだ覆面の一人、前のめりに倒れた頸から、とくとくと溢れ出る血だ。

「掛れ！」

外の声。

「——」

闇しぐれ
新太郎無言で身を退いた。戸袋の蔭にいと見たから、敢て踏込む者が無い、と——不意に水口の方の雨戸をばりばりと蹴放す物音がした。

「踏込め！」

もう一度下知の音がした。

「やっ！」

といつて一人が槍を、此所ぞと思う壺を狙って突出す、とたんに新太郎、そのけらくびを掴んでぐいと引いた。相手は引かせまいと操込む、刹那、新太郎はその力につれてぱつと外へ出た。

「えい」

槍もろ共突放されて、後ろざまに倒れる奴には眼もくれず、とび出るが否や、右側にいた一人の面へ横なきをくれた。

「あ！」

とたじろぐ。

「うぬ」

残った一人が無法な突き、弾丸のようにとびかぶるのを、さつと開いて躡しさまひっ払った、臍腹を充分に裂かれて、

「がっ！」

異様に喚きながらつんのめる。

「外だ」

裏から入ったのが、家の中で叫んだ。

槍と共に突きとばされたのは、立直って構えているが、もう積極的に突掛る気力がない、先に面をはらわれたのは、暗がりにもんで呻いているばかりだ。

「安芸新太郎は此所に居るぞ！」

新太郎が叫ぶ。

「掛れ！」

と二人が、一人は槍をふるって玄関から外へ出て来た。

「待て」

新太郎が――、

「名乗れ、名を聞こう」

「――」

「名乗れぬか」

「――」

「然らば意趣を聞こう、頼まれてか、遺恨あつてか、どうだ！」

と、槍を持ったのが、それには答えずさつと突きを入れた、咄嗟に右へ、大きくとんで避ける新太

郎、

「云え！ 聞こう」

と促した。とたんに、ぐわん！ と耳を劈く銃声、しまったと思つてすくめる首、耳元をびゅんと弾丸は外れた。

「うぬ、我慢ならぬ」

呻くように、新太郎つと寄りざま、突きかかる槍をはねあげて足を払う、

「うう」

ただだと横ざまに倒れる。刹那！ 後から拝みうぢに斬りつけるのを入身は体当り、どしんどくれて身を沈めると、

「やっ！」

振向きながら斬った。

雨がしずかに降りだして来た。

四

五人を倒して、

「まだ居るか、居たら出て参れ！」

大声に呼ぶと、棗の樹蔭から、同じ覆面の者が一

人、ぬっと出てきた。

「貴公か、種ヶ島は？」

「——」

「三十匁強薬、腕がよかったら二丁は利くやつを、惜しかったな、どうだ」

「——」

何を云われても無言、小太刀を青眼にとって、じりっ、じりっ、と詰寄って来る。

「ほう、是は出来る」

新太郎は左へ廻りながら、

「いままでの奴らは藁人形を斬るようであつたが、貴公は少し手応えがありそうだ」

「——」

「むざと殺すには惜しい」

「——」

「退かぬか、六人も倒れて居れば斬り込みの名目はたつている、退け！」

突然陰の気合。小柄な体が躍ったと思うと真正面から突きた、全くの捨身、合討に死のうという必死の業だ。

「おっ！」

危く身を転じた新太郎、

「待て！」

といひざま相手の利腕を逆に取った。同時に蹴上げてくる足を、さっと掬って、

「待てというに」

とそこへ捻伏せた。

「——」

無言で呼吸を忍ばず曲者、新太郎はその衿を掴んで引起そうとしたが、思わず手をひいて、

「貴公、女だな！」

と叫んだ。衿へやった手に、ふっくらと弾力のある乳房が触れたのだ。そういえば腕などもむっちり、と脂ぎって柔かい。

「さ、いわれい」

新太郎は声を改めた。

「何の為の暗殺だ、遺恨あつてか、討たれる筋があれば安芸新太郎、逃げも隠れもせず討たれてやる、意趣を聞こう」

「お起し下さいませ——」

覆面の女が、弱々しく、

「お話し申します」

喘ぎながらいった。

「さ」

と新太郎が身を退ける、油断！ 身を起した女

は、ぱっと横へとんだ、

「あっ」

と新太郎が手を伸ばすと、危くすり抜けて脱兎の

ように闇へ、

「待て！」

と五六間追ったが、足の早いこと、闇にまぎれて

忽ち見えなくなってしまった。

「残念なことを——」

呟きながら戻って来ると、

「先生、御無事ですか」

と玄関内から辰が覗いている。

「拙者は無事だが、ここに無事でないのが五人ばかり居る」

「へえ五人やりましたか」

「二人は逃げた」

「五人とも皆のびてますかい」

「一人は助かるまい、だが四人は片輪になる位のことだろう、どういう訳で、拙者の首を狙ったか、それを知り度のだが、此奴らとても饒舌るまい、大体見当はついているが——」

新太郎は刀に拭いをかけた。

「や、降って来やあがった」

「入ろう」

「此奴らをどうしましょう」

「うっちゃって置け、誰か来て拾って行くだろう、

あ、酔いが醒めた！」

新太郎は寛々と家の中へ入って行った。雨は次第

に降りつるばかりである。

五

「ひどい血ですぜ」

内へ入ると辰が、新太郎の衣服の裾を見て声をあげた。

「返り血だ心配するな」

新太郎帯を解きながら、

「返り血だ心配するな」

「それより貴様横になつて居れ、傷口を縫うまで動いてはいかぬ」

「あ痛たた」

辰は矢庭に眉をしかめて、

「そう云われたので急に痛くなつてきた、あ痛たた」

辰を横にして、汚れた衣服を脱ごうとすると、ぱたりと杓元から落ちた物がある。

「何だ——」

と見ると、銀平打の釵かんざし。

「はて妙な物が」

拾いあげて検めると、片面九曜星、片面が丸に二引の比翼紋だ。

「九曜星は拙者の紋だが、丸に二引は——、丸に二引——」

暫く考えていたが、はっと胸にこたえたらしく、思わず釵を握り緊めて、

「それでは彼の女が！」

と呟いた。

この安芸新太郎は何者だろう。

越後野本の小藩、林田備前守の国老次席安芸銃造は新太郎の父である。故あつて家を勘当され、江戸へ出て早くも五年になる、今年二十八歳。色が白くて、眉秀で、眼涼しく髪濃く、身丈抜群にして弁舌能く——と何拍子も揃つた男振りだ、芝新錢座の浜よりに、空地のまん中に立腐れ同様な家を借りて住むこと半年にして、

「新錢座の色男」

「業平浪人」

と綽名がきまつて、その喧嘩っ早さ、義気の強さと共に、わつと人氣が集つた。殊に近くの娘や浮気な女房連は、新太郎の通る度に胸をときめかして覗き見をする位、中にも新錢座の表通りにある小料理屋「よし田」の女主人、お園という中年増が大したのほせ方、頼まれもせぬに押掛けて行つて濯ぎ物から拭き掃除、飯、酒の面倒までのがさぬ親切、これでもかこれでもかと心中立をするがもう三年になるというのものにならぬ。それもその筈、当の新太郎は男振りとはまるで逆に、剣は真影流を極めて、自分独特の一派を編出しているし、槍は佐分利流を